

大谷大学
2008年度 大学院特別セミナー

Über das "ich" (ego) hinaus.
Zentrale Themen existenzieller Theologie
im Dialog mit Jōdo Shinshū
"私"を超えてゆくこと：実存神学の中心的テーマについて
－浄土真宗との対話のなかで－
ゲルハルト・M・マルティン
(マールブルク大学教授・大谷大学客員教授)



ゲルハルト・M・マルティン博士
(Prof. Dr. Gerhard M. Martin)

1942年、ドイツ生まれ。ヴッパータール、チュービンゲン、ハイデルベルク、ボン各大学で福音主義神学及び哲学を専攻し、1973年、チュービンゲン大学にて神学博士号を授与される。米国・ユニオン神学校での研究・講義、ドイツ・アーノルトツハイン神学アカデミーの研究主任、代表ディレクターを経て、1982年よりマールブルク大学福音主義神学部実践神学教授。1999年より大学説教者を兼任。

専門領域は、宗教的テキストと儀式の多面的解釈学、ビブリオドラマ（聖書劇）、スピリチュアリティ。神学・深層心理学・美学の対話、キリスト教・ユダヤ教・仏教の宗教間対話。

著書には *Fest und Alltag. Bausteine zu einer Theorie des Festes*, Stuttgart 1973, *Vom Unglauben zum Glauben. Zur Theologie der Entscheidung bei Rudolf Bultmann*, Zürich 1976, *Weltuntergang. Gefahr und Sinn apokalyptischer Visionen*, Stuttgart 1984 (邦訳『世界の没落』野村美紀子訳、青土社、1996年)、*Sachbuch Bibliodrama. Praxis und Theorie*, Stuttgart 1995, 2001 などがある。

■セミナー開講

日程：10月6日（月）	10時40分～12時10分	講義
	12時50分～16時00分	ディスカッション
10月8日（水）	10時40分～12時10分	講義
	12時50分～16時00分	ディスカッション
10月14日（火）	10時40分～12時10分	講義
	12時50分～16時00分	ディスカッション
10月16日（木）	10時40分～12時10分	講義
	12時50分～16時00分	ディスカッション
10月17日（金）	10時40分～16時00分	ディスカッション

(途中12時10分～12時50分休憩)

場所：講義 大谷大学尋源講堂（尋源館2階）
ディスカッション 大谷大学マルチメディア演習室（響流館3階）

■公開講演会

日時：10月10日（金）17時50分～18時50分
題目：キリスト教における肉体的存在、社会的・精神的身体－大乘仏教との対話における一つの手がかり？
場所：大谷大学メディアホール（響流館3階）

■参加資格

- ① 大学院生（K-GURSの単位互換で単位取得希望の方は、出来る限り全期間受講可能であること）
- ② 上記テーマの研究に従事もしくは関心のある研究者
※ 講義のみ、ディスカッションのみ、公開講演会のみも参加も可能です。

■その他

- ① 参加費用は無料です。
- ② 講義はドイツ語で行われ、ドイツ語原稿と共に日本語訳原稿が配布されます。ディスカッションは英語で行われますが、議論を適宜日本語でまとめながら進めていきます。日本語での質問も通訳いたします。
- ③ 受講希望の方は、氏名、所属（大学名等）、連絡先（住所・電話番号等）を明記の上、ハガキ、FAXまたはEメールにて9月30日（火）までに下記へお申し込みください。

申し込み・問い合わせ先

大谷大学 学生支援部教務課

〒603-8143 京都市北区小山上総町
TEL 075-411-8117 FAX 075-411-8150
E-mail kyoumu@sec.otani.ac.jp

■講義概要

Über das "ich" (ego) hinaus. Zentrale Themen existenzieller Theologie im Dialog mit Jōdo Shinshū "私"を超えてゆくこと：実存神学の中心的テーマについて －浄土真宗との対話のなかで－

第1回：10月6日	実存神学と実践神学。セミナーの内容、目的、方法についての基礎的説明
第2回：10月8日	私、我と汝、自己、心
公開講演会：10月10日	キリスト教における肉体的存在、社会的・精神的身体 －大乗仏教との対話における一つの手がかり？
第3回：10月14日	聖なるものたちの共同体。教会とサンガ。古今の変革期的な状況において 社会化された宗教がとった様々な形態について
第4回：10月16日	“私”を超えてゆくこと。愛、憎しみ、慈悲(karuṇā)
※10月17日(金)はディスカッションのみで、講義は行われません。	

「私(ich/ego)」という言葉づかいは、近代ヨーロッパにおいて、そしてまたキリスト教において大いに発展したのですが、その一方でこの言葉の意味は必ずしも十分に検討されているとは言えません。また、東洋の社会や宗教においては、この言葉づかいは文法的にもレトリック的にも決して自明のものではありません。むしろこのような言い方は、存在論や形而上学という観点からも疑いを投げかけられています。

それゆえ主要な問いは次のようになります。すなわち、「私」という概念に関して、日本的・仏教的な視点からの批判的な問いかけにただ耐えうるというだけでなく、対話を通じてその問いかけを生産的に受けとめる用意が西洋の文献や議論それ自体の中にあるのか、という問いです。

「実存」神学において、神学的・宗教学的の研究は実存哲学という手がかりとの結びつきで考えられねばなりません。その際には、学問上の活動の中で「問題そのもの」と実際の生との関係が失われてはならないということが重要です。

上記の講義タイトルを見れば、主題となる重要な点がどのようなものであるかが明らかになるでしょう。

また、10月14日のディスカッションの時間では、『観無量寿経』の阿闍世の物語を「ビブリオドラマ(聖書劇)」／「スートラドラマ(経典劇)」という創作的な方法で解釈します。

この特別講義及びディスカッションは、1990年代から続いている大谷大学とマールブルク大学との研究交流を更におし進めて、その交流を近代末期／ポスト近代において特徴づけるものであります。しかしまた今回の一連の講義はこれ自体でも独立した内容を備えており、その意味においては、初めて聴講参加する皆さんにとっても全くふさわしいものであります。

講義の参考として、*The Eastern Buddhist*に掲載された幾つかの論文を挙げることができます。さらに、中世の遊行僧(念仏聖)のことは、『一言芳談』も特に注目する必要があるでしょう。

※セミナーの準備として以下の書物を薦めますが、参加に必須ということではありません。

- ・ バールト、パイ、箕浦、宮下、門脇編『仏教とキリスト教の対話』I、II、III、法蔵館
- ・ Plain Words on the Pure Land Way. Sayings of the Wandering Monks of Medieval Japan, translated by Dennis Hirota. Ryukoku University Kyoto (= *The Eastern Buddhist* IX, 2 und X, 1 (Oct., 1976 / May, 1977))
- ・ Gerhard Marcel Martin: *Sachbuch Bibliodrama. Praxis und Theorie*. Stuttgart 2001